
バトン

godlove

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトン

【ZPDF】

Z0542D

【作者名】

goodlove

【あらすじ】

クラスで流行りの（バトン）で結ぶ淡い恋の話です

君は誰が好きですか？

君は僕が好きですか？

僕はこれからもきっと君が好きだと思います。

高2の冬、俺は相変わらず恋をしていた。

同じクラスの隣の席の美希。

長いサラサラの髪が綺麗で、すこしハーフっぽい顔立ちが魅力的だつた。

すこしでも喋りたくて、わざと教科書を忘れたり宿題を忘れてノートを見せてもらつたりした。

休み時間になるとまた女達がワイワイ騒いでいた。
バトンリレーだ。

ノートの切れ端に絶対答えないといけない問題を3問書いて相手に渡す、バトンを出したほうも答えたほうも誰にも言っちゃだめ。

答えたほうは次にバトンを出す奴を選ぶ権利が与えられた。

もちろん権利を放棄する奴もたくさんいたし、告白じみたことは滅多になかった。

ふん。女の考えそうな遊びだこと。

一度だけ、俺の友達に来たバトンを盗み見した、友達に女がバトンを渡しにきた時はクラスが騒然とした。

それはもうほとんど告白と言つてもいい行動だつた。互いに真っ赤な顔をしてバトンを渡し、受け取つた。

俺にもあんな勇気があればなあ。

バトンの内容は

- 1) 好きな人はいますか？ A>いません
- 2) クラスで誰が一番可愛いですか？ A>わかりません
- 3 今日、一緒に帰りませんか？ A>いいよ

あれほどの勇気を出した女には同情したが、問い合わせ1～3までは男友達に対するブラフだった事は

問い合わせ3でOKを出している事からすぐにわかった。
それにも、まるで中学生だな。バカバカしい。
とにかく、それでカッフルが生まれるのが俺のクラスの流行になつてしまつた。

友達は次にバトンを出す者を決める権利を放棄した、こうなるとまた女子達が騒ぎ出した

休み時間中ずっと次の挑戦者を決める会議をしていた。

美希はその他大勢と一緒に会議に参加していく、俺は気になつていた。

帰宅部仲間との帰り道の話題は、やっぱり今日のバトンについてだつた。

一人が、美希からバトンきたらいいな！と突然言い出したからドキツとして、別にどうでもいいよと顔を真っ赤にして答えた。
はいはいはい。と、みんながニヤニヤするから俺は恥ずかしさに
「美希からバトンくるくらいなら死んだほうがマシだね！」
と、大声で言つてやつた。

俺達をスタスタと追い越していく美希と、2人の美希の友達が通り過ぎるのに気づいたのはその直後の出来事だった。

追い越しざまに美希の友達が言った「あんたにマジ最低だね」とい

う言葉に俺は打ちのめされた。

恋が終わるのは意外に早く、予期できない事だと知った日だった。友達の聰が俺の肩をポンと叩いて、ドンマイと小さく言った。

別に、とだけ答えて俺達は美希達に追いつかによつてゆっくり歩いた。

一度だけ美希が振り向いてまたドキッとしたが、その日は明らかに俺を睨みつけていた。

次の日、俺はまた教科書を忘れて行つた、何も無かつたよつて渾身の笑顔を伴つて美希に話しかける作戦だつた。

なのに今日に限つて数学教師の岡島が「なんだ教科書忘れたのか？」俺の使つていいぞ」と、余計な気を使いやがつた。

タイミングを逃がした俺は結局、丸一日美希と口をきく事ができなかつた。

美希も一度もこつちを向くこともなかつた。
もともと始まつてもいなかつた俺の恋は、やつぱり復活することも無くて胸がズキンと痛くなつた。

帰り道に聰が、美希の事好きなんだろ？と聞いてきた。

やつぱりバしてんのか、好きじゃなくて（好きだった）んだよ、うるせーな。

諦めんのか？

うるせーよ

頑張れよ

いや、無理でしょ。普通に無理でしょ。

もうやめてくれよ、あんなの普通に誰だつて嫌だぜ（マジ最悪なんだけど）とか語尾上がりに言われちゃうよ。

聰は優しい奴だ、こんな友達ずっと大事にしたい。

聰はなんとか俺を励まそうしてくれた。

「あーー！」

なんだよ

「お前バトンやれよ！」「

何を言い出すのか、聰は自信満々に言い出した。
無理に決まってる、こいつ見えても俺は照れ屋だ、あんなに大騒ぎされたくない。

第一負けるとわかってる勝負なんかする気もしない。

「俺が段取りしてやるからまかせろって！」

俺は何度も嫌だと言つたが聰は聞く耳を持たなかつた。

一体どうなるのか、ヽ、ああ明日学校休もうかなあヽ、
夜に何度も聰にメールしたけど返事は返つてこなかつた。

次の日の教室は異様な光景だつた。

ちょうど教室の真ん中に位置する俺と美希の席を隔てて女子と男子
が真つ二つに別れていた。

男どもは何か相談しているようだつた、もちろん議長は聰。。。。

嫌な予感がしてもう帰ろうかと思つた。

女どもは俺が教室に入つたとたんに急に静かになつた。

何が始まるんだよお、勘弁してくれよ。

ホームルーム直前に美希が来た。

やつぱり可愛いなあ、一瞬目を奪われたがすぐに逸らした、目が合
うとどうしていいかわからない。

昼休みに事件は起つた。

クラスで可愛さでは上位に入る彩が、サッカー部の陽一にバトンを
渡した。

いつものように、クラスは大騒ぎになつて陽一はその場でバトンを開き答えを書いた。

彩が突然泣き出し、陽一が勢よく椅子の上に飛び乗つた。

「俺達は今日から付き合います！次にバトンを渡す奴の机に放課後

バトンを入れるから、頑張つてほしい！」

なんだよそれ、俺に渡すのかよ。

一気に憂鬱になつた、話しかけた陽一が勢いで言つたのか、それとも全てが出来レースで聰が仕組んだ事なのかわからなかつたが別にどうでもいい事だつた。

それよりあれだけ嫌だと言つたのに、と聰が恨めしくなつて教室にいることも美希が隣にいる授業さえも嫌になつた。

放課後、やっぱり俺の机にはバトンが入つていた。

俺は誰にも見られないようにズボンのポケットに入れ、そのバトンを廊下の窓から捨てた。

次の日学校に行くと、今日も教室は盛り上がつていた。

新しいカッフルが誕生していたからだ、聰が「なんでみんな彼女できんだよ俺にもバトンこないかなー」と、愚痴をもらしていた。

陽一は、俺じゃなくクラスの女の机にバトンを入れていた。

急に胸がドキドキ鳴つて、万が一の可能性を信じ始めた。

ただなんとなく、そんなわけないと思いながら何故か俺には美希からのバトンだと思えた。

放課後、いつも一緒に帰る聰に呼び止められる前に昨日捨てた廊下の外にでた。

草刈り機やスコップを入れる、倉庫があつて用務員の先生意外はほとんど誰もこない場所だった。

たしか、この辺に、ヽヽヽヽ、しばらく探したが昨日のバトンは無かつた。

冬の早い夕暮れが恨めしかつた、もうすぐ真っ暗になる。

まあ、そんな都合いい事あるわけないかと、諦めて帰るひつと思つた。

「問い合わせ1・あなたは誰が好きですか？」

後ろから聞いた声にビックリして固まってしまった。

振り向けずにしゃがんだまま下を向いていた。

「問い合わせ1・あなたは誰が好きですか?」

俺は、 、 、 、 俺の好きな人は、 、

「問い合わせ。あなたは私が嫌いですか？」

問い合わせに答えるよつとした俺の言葉をさえきる様に問い合わせ2が来た。

お、俺はお前がで

「問い合わせ、私は、君が好きです」

頭が真っ白になつて、何も見えなくなつた。

少し、声が震えていた。

俺も同じよつて、震えた声でゅつくり答えた。

「問い合わせ1・俺は美希が好きです。隣にいるだけで毎日幸せです」「問い合わせ2・俺は君を嫌いではありません。君を傷つけた自分が嫌い

「問い合わせ・俺はこれからもずっと君が好きです」

妙に落ち着いた、はやく美希の顔を見たくて振り向いた。

わっ――――――! つと、歓声が起つた。

廊下の窓からクラスのみんなが顔を出して騒いでいた。

振り向いた俺の前には美希がいて、恥ずかしそうに笑っていた。

騒いでいる中心には聴がいて、やつぱりなと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0542d/>

バトン

2010年11月28日11時21分発行